

西早稲田キャンパス学生読書室のWINEシステムへの移行

図 書 館

はじめに

2001年9月から法学部学生読書室、ついで教育学部学生読書室がWINEシステム(中央図書館やキャンパス図書館で稼働している図書館システム)で検索や貸出返却などの稼働を開始した。両図書館の所蔵データはWINEデータベースにすでに移行しており、Web環境さえあれば、どこからでもアクセス可能になっている。すでに社会科学部学生読書室が2001年4月からWINEシステムへの移行を実施しており、同一検索画面上で中央図書館や戸山図書館、理工学図書館、所沢図書館などとあわせ三学生読書室の所蔵状況を確認できる。

これまで学生読書室は組織的位置付けや運営の独自性等から課題が箇所内で完結し、またそれなりに機能する状況にあった。今回のWINEシステムへの移行を機に、他図書館との調整という新たな状況が生じてきていることもあり、あらためて学生読書室の状況を報告する。

1. 学生読書室の設立と特徴

学生読書室は戦後の新制大学制度発足にともなっておかれ、1960年代の学部学生、大学院研究科学生の拡大に対応する形で急速に整備されてきた。その運営経費(図書購入費用を含む)の一部が学生の負担であり、貸出制度の充実など学生の利用を優先した運営方針やカリキュラムなど学習内容にそった収書方針をはじめとして箇所に密着した形で運営されてきたところに特徴がある。したがって収集する資料も保存を前提とした基本財産図書というより利用を優先した消耗品扱い図書の性格を持つ。また箇所によっては運営についても一部を学生の自主性にまかせるなど箇所の特性にあわせた形態がとられてきた。

1980年代後半になるとキャンパス図書館を中心に新たな展開がはじまる。1980年代半ばから創立百周年記念事業として新中央図書館の建設が課題となるが、その検討経緯の中で新中央図書館は研

究・学習の両機能を併せ持つ施設として設計された。同時期に整備されたキャンパス図書館にも、このことは反映され、1987年の所沢図書館、1992年の戸山図書館も学生読書室機能を包含したキャンパス図書館として整備される。また理工学図書館も研究図書館(51号館)と学生読書室(52・53号館)とに物理的には離れて存在しているものの、1989年には組織的にはキャンパス図書館として一体のものとして位置付けられている。

一方、西早稲田キャンパスでは旧図書館(2号館)の一部が高田早苗記念研究図書館として再整備のうえ開館(1994年)し、雑誌等を管理する教員図書室などとあわせ研究者のための研究図書館機能を果たすよう位置付けられているが、学習図書館機能を受け持つ学生読書室は従来同様の形態で並存して現在に至っている。

2. 貸出システム等の機械化と課題

早稲田大学図書館の機械化への取組みは早く、すでに1984年から書誌データとしての蓄積をはじめめるが、図書館のトータルシステムとしてのWINEの本格稼働は1987年の所沢図書館の開館からとなる。その後中央図書館や他のキャンパス図書館などに範囲を拡大し、書誌・所蔵データベース(書誌159万件、所蔵316万件、2001年10月現在)を共有し、本格的なネットワーク利用を稼働している。この間1998年には現在のINNOPAC(アメリカのInnovative社が開発した図書館システム)をベースにしたシステムに更新している。

これらの図書館システムとは別にそれぞれの学生読書室でも、貸出業務などを中心にした機械化がはかられてきた。1980年代後半に理工学部学生読書室で貸出管理システムの機械化が実施されると西早稲田キャンパスのいくつかの学生読書室でも同様のものを導入する。1990年代の半ばになるとリース期限切を機に、いわば第2次のシステムの導入が課題となる(別掲の渡邊氏の報告を参照)。

主管箇所である教務部の調整により、政治経済学部、法学部、教育学部および社会科学部の四学生読書室で、ネットワークこそ形成しないものの、おなじ日本IBM社のLibVisionシステムを採用した。これらのシステムは貸出・返却管理からさらに進んで書誌・所蔵データ管理を伴う図書館システムであり、利用は貸出を中心に飛躍的に拡大した。

このように順調に機能を発揮していたシステムであったが、2000年度のシステムリース契約期限切を前に以下のような課題が明確になりつつあった。

検索利用上の制約

コンピュータ教室の整備やパソコンの普及が進展したことにより、場所を選ばず検索できる環境が整ってきたことから、利用者から読書室まで行かなければ圖書の所在状況がわからないシステムはWINEに比べて利用しにくいと指摘された。

システムの維持管理および経費負担

2001年3月でリース契約期限がくるが、納入業者から現状どおりのシステム維持はできないとの通告があったこと、また今後のバージョンアップにあたってはサーバ等を含めメンテナンス費用および機器価格において高負担が予想された。

担当要員確保

箇所によっては、システム管理も含めた担当者の確保が課題になっていた。

3．WINEシステムへの移行

上記のような課題が明らかになりつつあるなかで、直接には2001年度予算申請を契機として学生読書室システムの調整が本格化した。図書館はシステムのハード管理および予算の所管箇所である教務部情報企画課と連携をとりつつ、図書館システムを大学全体の問題としてとらえ、学生読書室担当者とも調整をはかりながら検討した。その結果、図書館としては、以下の点などを理由に、学生読書室がWINEシステムに移行するのが望ましいことを図書館の基本的考え方として提案した。

同一インターフェースで情報の共有ができる。

WINE契約を変更することなく現行の範囲内で

学生読書室稼働をまかなえ、経費の効率的支出が期待できる。

システムメンテナンスを含め管理をWINE一本に収斂できる効率性。

結果として各箇所からWINEシステム移行への方向性について基本的了承を得た。

WINEシステム移行へ基本的了承を得たが、2001年度からWINEシステム移行を実施するにはいくつかの課題があった。うち重要なものは現行システムで使用しているデータの移行である。データの精度がまちまちであるなどの理由により、一括機械処理が難しいこと、各読書室で所蔵しているデータの量に差があること、学生の利用と準備を調整する必要があることなどを考慮して稼働開始日を次のように設定した

2001年4月 - 社会科学部学生読書室

2001年9月 - 法学部学生読書室

2001年9月 - 教育学部学生読書室

2002年4月 - 政治経済学部学生読書室

2002年度中 商学部学生読書室

なお先に述べたとおり社会科学部、法学部、教育学部の各読書室はすでにデータ移行を終了し、システムを稼働している。

4．共通利用規則の運用

これまで各学生読書室は原則として当該学部の独自性のもとに、蔵書構築・施設設備を維持・運営してきている。したがって、西早稲田キャンパスの各学生読書室の利用においては、教育学部、社会科学部学生読書室の共同利用（貸出可能）を例外として、他学部の学生は閲覧・コピー利用のみ可能で、貸出はできなかった。

今回WINEシステムに移行した学生読書室の情報がWINEデータによる共有化へ前進したことにより、当該学部生以外の学生の貸出希望が増える結果となった。このことはオープン授業、学際領域授業の増加など学内の動きも要因として指摘できる。また図書館行政懇談会（第一次）答申を受けた中央図書館・キャンパス図書館における利用規則の平準化の実施も大きく影響していよう。

これらを踏まえ、当該学生読書室間でさらに一歩進んだサービス体制の検討が課題となった。9月からの法学部、教育学部学生読書室のWINEシ

ステムへの移行を機に、社会科学部学生読書室を含めた三読書室間の貸出規則の共通化の実現である。この前提として何度も触れるように、各学生読書室の存立意義や独自性が最大限尊重される必要性が確認されたことは言うまでもない。各該当読書室の担当者や図書館の関係者を中心に法・教育・社会科学部の学生読書室の共通貸出規則を検討し、それを基に、最終的には三学生読書室毎に既存のサービスが拡大することを基本とした原案を作成し、各学部の教務担当あるいは図書委員会へ提案した。

幸いにも各学部当局からのご了解をいただくことができ、すでに広報されているとおり9月から3学部学生読書室の共通貸出規則（図書館HP トップページ「学生読書室（法・教育・社学の利用規則について）」参照）で施行されている。現時点では当該学部生等以外の学生への適用はできないが、該当箇所の判断を前提として、利用状況の実績次第では、利用範囲の拡大については検討課題になりうると考えている。

おわりに

この9月からの三学生読書室によるWINEシステム運用と共通貸出規則適用から約1ヶ月が経過するが、さしたるトラブルもなく、順調に運用している。また現在、政治経済学部学生読書室の2002年4月のWINEシステム稼働に向けて、データ移行等の準備が順調に進行している。現行シス

テムの整備等から準備が遅れがちであった商学部学生読書室も2002年9月にはWINEシステム稼働ができそうな見通しである。

先ごろ学生部から「2001年度 第20回学生生活調査報告書」、監査室から「監査報告書 学生サービスの現状の把握」があいついで公表された。ともに図書館の利用について関心の高さを指摘している。それらによると総じて中央図書館、学生読書室は利用しやすい環境にあり、半数以上が1週間に2,3日利用するなど図書館の存在が学園生活と密接に関係していることを示している。

図書館としてはその整備・充実があらためて問われていると受止め、引き続き大学院学生読書室のWINEシステム参入やさらなる利用者サービスの向上につながることを模索していきたい。

【本号表紙写真】

小杉天外著『魔風恋風』 前編口絵 梶田半古画

春陽堂刊 明治37年(1904)6月(4版) 文庫14 D577

小杉天外(1865~1952)は秋田県出身の小説家。明治30年、島村抱月・後藤宙外らと雑誌「新著月刊」を出し、「深刻小説」を書いたが、世間一般には、明治36年に発表した通俗恋愛小説『魔風恋風』で有名になり、流行作家となった。これには、当時新進の日本画家梶田半古(1870~1917)の描いた挿絵が評判になったことにもその一因がある。はかま姿で髪をなびかせ自転車に乗るヒロインの女学生は、当時の先端的ハイカラ風俗をあらわしていた。一世を風靡したこのファッションは、いまま卒業式の定番スタイルとして残っている。